

ごっこコーナーにおける「役」の生成・成立の発達過程

学校教育開発学コース 秋田 喜代美
淑徳文化専門学校 増田 時枝

A Developmental Study of the Role Assignment Processes in the Symbolic Play

Kiyomi AKITA, Tokie MASUDA

This study examines the developmental processes of 4-year-old children's choice of roles and negotiation about role assignment with peers in the symbolic play. The children at the same corner in the classroom, "playing house corner" were observed and recorded by a video camera and field-notes for one year. The three major results were as follows: (1) There is a developmental tendency to use from a symbolic token to verbal declaration as expression of the choice of a role. (2) The individual differences of choice and negotiation are salient at the earlier time of school year. (3) The failure of role assignment results from role refusal by other children and role abandonment by oneself. The developmental processes of role-negotiation and assignment processes among children show the relationship building and self-realization processes through play.

目次

- I 問題と目的
 - 1 役の生成・成立・展開過程
 - 2 遊びにおける「場」の意味
- II 方法
 - 1 研究協力者
 - 2 観察期間
 - 3 観察方法
 - 4 分析方法
- III 分析結果
 - 1 1年間における生成・成立の時期的変化
 - 2 役をめぐる幼児のスタイルと内的葛藤
 - 3 役の成立から展開へ
 - 4 「役」不成立の事由
- IV 全体的考察と今後の課題
 - 1 役の生成・成立からみた4歳児の発達の側面
 - 2 保育実践への示唆
 - 3 今後の課題

I 問題と目的

1 役の生成・成立・展開過程

幼児は自ら遊びを始め、その遊び世界における「役」

を考え生みだしていく。この自発性や内発性を出発点とする“自己実現の遊び”に幼児が十分取り組めるようにすることは、遊びを中心とする幼稚園生活における重要な課題である(津守, 1987)。“遊び”を支える認知的・社会的能力の発達や、加齢や集団の形成に伴う遊びの発達過程については、国内外で古くから数多くの心理学研究が、自然観察や面接調査を通して調べられてきている(例えば, Garvey, C. 1977/1989)。また遊びを支える保育環境や教師の役割は、保育研究領域での近年の中心的研究課題の一つとなってきた(例えば, 柴崎, 1997; 秋田, 2000)。

しかし、幼稚園に登園し自ら遊びを始める時点で、幼児が主体的に「役」を選び、それをどのように仲間が受け入れ、“遊び”として成立展開していくのかという始まりの過程に焦点を当て、その発達過程を実証的に検討した研究はこれまでにない。“遊び”におけるフレームやフォーマット、スクリプトの存在は指摘され抽出分析されてきているが、それだけではやりとりを通して創造的に構成されていく遊びの即興的な側面は分析できない。そこでこの即興性をとらえていく視点が必要である(Sawyer, 1997)。ごっこは、「役割・プラン・もの・状況設定」から構成される(Garvey, 1977)。本研究では、この役割を“遊び”の始まり場面における「役」という視点からとらえ、「役」の生成から成立・不

成立、その後の展開という役をめぐる即興的な生成と交渉の過程に焦点を当てその発達的变化をとらえる。その時、ごっこコーナーという同じ「モノと場」に限定し、1年間4歳児1学級を対象に縦断的観察研究により明らかにすることを目的とする。

社会心理学では「役割」とは、集団の中で共通したイメージやプランのもとに活動を類型化し、集団内の個人が特定の地位や場面に付随した言動を行い担う役を示すのに使用される概念である(高木, 1990)。つまり、集団を単位として捉えた時の各個人の立場を位置付ける概念である。ごっこ遊びにおいても外部観察者からは「あの子は何々ごっこで何の役割をやっている」と認知される。しかし、行為主体である個々の幼児の側から捉えると、自らが担おうと生成した役あるいは他の友人に呼応して自らが生成する役が、仲間を受容されることによって「役」として始めて成立し、遊びの展開のなかで次第に「役割」としての様相を呈していくという生成的に進行する過程である。また主体的に「役」を生成しても、否認や拒否される場合には、遊びを進めていく上でその「役」は成立せず「役割」として展開していくことはない。そのために拒否されると新たな「役」を即興的に生成したり、言語・非言語的なやりとりを行ったりすることによって仲間を受容されるよう交渉していくことが必要になる。たとえば、「宅急便でーす」と、ままごとコーナーに積木を抱えてやってきた幼児が、「ありがとう」と他児から受け入れられて始めて「宅急便や」の「役」が成立する。けれども繰り返し遊んでいるうちに、「もう、いっぱいだからいい」と断られると、そこで状況に応じてダイナミックに見立てを変換する方略を用い、次からは、「郵便でーす」と積み木を郵便小包に見たててことで受け入れられ、「郵便や」の「役」が成立し遊びが継続していくことになる。

このように、行為主体となる幼児が、仲間との関係の中で遊びの流れを作り出していくために、固有のやり方で表出する非言語・言語行動による象徴的な行動を、本研究では「役」と操作的に定義する。遊びの始発を「役」の生成過程と成立過程、それに続く展開過程の三相に分節化して捉え分析することで、ごっこ「遊び」成立における幼児の言語・非言語による即興的な生成過程を分析する。本論文中では「役」の生成とは、ごっこ遊びを始める時の、非言語・言語行動による固有の表出をさす。「役」は、生成した「役」が他児との相互作用の中で受容・容認された時に「成立した」と捉えることにする。他児からの誘いかけという受動的契機でも、誘いかけに応じて自らの意思で固有な言動を表出

した場合には、その幼児は行為主体として「役」を生成し、役が成立したものと捉える。また「役」の不成立とは、他児に承認を求めても呼応・返答がなかったり、否認・拒絶されたりして生成した役の継続が困難な場合である。「相互作用」とは、「役」の成立または不成立、遊びの展開を確定するために交わす他児との意味ある言語・非言語交渉や調整全般をさして用いる(都研紀要, 1992)。

これまでのごっこ遊び研究では、展開のルーチンの側面や役成立以後の展開における会話の展開に焦点をあてた研究が多く、即興的な言語・非言語的振るまいによる、ごっこ遊びの役の共同生成と成立過程の発達に焦点をあてた研究はない(Sawyer, 1997)。

また仲間入り研究では遊びの種類にはかかわらず集団への参入の方略のみに焦点があてられてきている(Corsaro, 1985)。高濱(1995)は5歳の自己主張タイプ2名の子どもが一旦仲間入りを拒否された時にどのように交渉していくかを検討し、時期によって交渉の方略や内容が変化していくことを明らかにしている。本研究では、子どものタイプにも注目し役成立の方略の違いについても検討する。

この研究を行うにあたっては、4歳児を対象とした。それは、4歳児の発達的特性を示す以下の事由による。3歳児では、幼児自身は友達と遊んだつもりになっていても、実際には並行遊びが多いこと(保育指針, 1999)、「場」や「モノ」を取り合いながら自分の区分を了解していくこと(都研紀要, 1996)、不快な働きかけを伴った一方向的な対人行動からいざこざが多く発現する(木下・斉藤・朝生, 1986)こと、などが明かにされている。

これに対し4歳児に関しては、自分の意思を明確にして自覚的に相手に提示できる(高木, 1997)一方で、友達の話聞けるという、言語化能力と聞く力というコミュニケーション能力の発達が示されている(保育指針, 1999)。また友達をはじめ人の存在を自覚的に意識し、他者への関心が自己抑制力を生み出す重要な契機として作用すること(津守, 1984)、自己主張とともに自己抑制力が発達していくこと(柏木, 大野, 田島, 氏家, 1989)、仲間の中では不快なことに直面しても少しずつ自分の気持ちを抑えたり我慢できるようになってくること(保育指針, 1999)という自己抑制による対人的調整能力の発達が示されてきているからである。金田(2000)は4歳児の個と集団の関係を「I自己主張期 1. 自分だけの自己充実 2. 思いつきの自己充実 II 集団への働きかけ期 III 自己コントロール期 1.

互いを認め要求しあう自己充実、2. 集団の中で自己変革する自己充実」と3期5相の発達で自己主張のみから自己調整へと変化していく様相を明らかにしている。局所的な「やる」を相互の「とる」行動とすり合わせながら、共通の遊びやイメージを作りだして、ひとつの「遊び」を共有・展開(岩田, 1998)していくことが4歳では可能になり、仲間といることの喜びや楽しさを互いに感じられるようになってくる(保育指針, 1999)という他者との共有可能性が様々な研究から示されている。またそのために高橋(1991)によれば、幼児期後期の幼児は予告なしに遊びのフレームを作り、自分の行動を調節し抑制しながら遊びを展開していくメッセージ(メタ・メッセージ)を発信していくという。幼児たちの遊びはいつの間にか始発し、流れ出していくものであり、その遊びについていちいち他者に説明していかなければならないとしたら遊びは中断され、面白さは半減してしまう。このため、仲間と協働して計画を遂行していく能力や自分の行動を調整したり抑制したりする能力の発達に支えられた言動の発現が、遊びのフレームや方向性を言語化して説明することに取って代わる重要な役割を果たしていく。したがって、「役」をめぐるやりとりを行う4歳児では、入園からの集団における関係の歴史性と個々の幼児のコミュニケーション能力や自己抑制能力の発達、「遊び」についての枠組みや計画の共有・協働可能性などが絡みあい、「役」生成・成立時の行動の変容をもたらすと考えられる。

上記に述べた4歳児に関わる先行研究に示される特徴から、役をめぐる幼児の発達の様相として、次の4点の変化が予想される。

第1に、入園当初にくらべ、時期の経過とともに“モノ”に依存せずに「役」を生成させたり、成立させていくことが可能になるだろう。

第2に、「役」の生成・成立過程における相互作用は、非言語行動を中心とした動きから、言語表出行動中心へと発達的に変容していくだろう。そしてさらに言語表出では、目的的・一方向的なものから双方向での交渉・意見調整・合議への変容がみられるだろう。

第3に、仲間と協働して計画を遂行していく能力や自分の行動を調整したり抑制したりする能力の発達に基づいた「役」にかかわる言動表出が、遊びの発展に重要な役割を果たすことになるだろう。

第4に、成立のみならず「役」不成立の場合にも、その事由は集団の歴史性に伴い時期とともに質的に変化していくだろう。

そこで本研究はこの4点を実証的に検討する。

2 遊びにおける「場」の意味

遊びは、“遊びに使う場”“遊びに使う物”“遊びの流れを生み出す言動”に規定され、それらが複雑に絡み合っ て展開していく(都研紀要, 1992)。しかし、従来の遊びに関する発達心理学的研究では、幼児が生活している“場”とのかかわりという要因は捨象することが多かった。“場”とそこにある“モノ”は幼児の現在の関心事を表現する手段を提供する(Garvey, 1989)。保育室における特定の物と場がつくりだす空間は一つの「地方(region)」, まとまりをもったゲシュタルト空間であり、それは物理的側面のみではなく、心理的なトポスである。保育室の各コーナーは幼児の頭の中に空間特性のゲシュタルトとしてのイメージマップを作りだし、遊びのカリキュラム空間を形成していると考えられる(小川, 2000)。したがってそのまとまりをもった空間を観察の一つの分節化単位としてとらえること、そしてその発達をとらえるのにふさわしい時期のくぎりとして保育では「期」の概念を使用することが、生態学的な場における発達研究においてはもともとされると考えられる(秋田, 2001)。

そして幼児はその特定の場に固有の特定の“モノ”と関わることで「役」を生成し、遊びが始まる。“モノ”の特性やその配列、配置が子どもの動きをひきだす(無藤, 1997; 野村, 1999)。と同時に、“モノ”は幼児の気持ちや動きを拒否することなく受けとめ、心を落ち着かせる働きをする(津守, 1987)。入園当初には特にこの smootherの面が顕著であり、その後、場や物が果たす働きは園生活の適応過程に従って変化していくであろうこと、また同じ場でもモノの果たす働きは変化することが推察され、場やモノとの関わりにおける「役」の発生・成立の質が、発達と共に時期的に変化することが予想される。

そこで本研究では、方法として観察場所を同一の場所に決め、そこでのごっこ遊びに取り組む幼児たちの「役」の生成・成立の発達過程を検討することにする。実際にはごっこが最も生まれやすい場の一つとして“ままごとコーナー”とその周辺に場所を限定し、入園当初からの1年間を縦断観察する。このことは1学級を観察対象としてもその場に関わる子どもの人数がさらに限定され固定化される側面をもつ一方で、平均的な子どもの姿ではなく個々の子どものスタイルを検討することを可能にすると考えられる。そこで個々の子どもの差異も分析することとする。

Ⅱ 方 法

1. 研究協力者 都内公立幼稚園(小学校併設の4歳児・5歳児単学級園)。自由保育形態の2年保育4歳児(新入園児)22名(男児15名, 女児7名)。平均月齢は54.6ヶ月(レンジ49-60ヶ月)。担任は教師歴22年の女性教諭である。入園前に保育歴のある幼児は男児7名, 女児2名で, 13名は初めての集団保育経験である。

2. 観察期間 1997年4月の入園時から1998年3月まで各月2, 3回計24回観察した。

縦断的分析を可能にするために, 幼児の実態をふまえⅠ期(4月から7月), Ⅱ期(9月から11月), Ⅲ期(12月から3月)に分けた。保育においては, 学期を単位とするのではなく多くの幼児に共通して現れる発達の節目を“期”として捉えていくことが指導上も重要な点であり, 行事への取り組みが期の節目となり発達援助をしていくことが指導の「ねらい」のひとつとして位置づけられている。行事体験後の成就感・達成感・自信・協調・共同に支えられて, 幼児の遊びへの取り組みは大きく変容していく。よって本研究では, 12月初旬に‘こどもかい’(生活発表会・学芸会とも称す)を設定している観察園の実態に則して, 12月からをⅢ期とした。なお観察に当たっては, 「観察日であっても日常的に保育を展開していくこと」を保育者との間で了解し開始した。観察内訳回数はⅠ期10回, Ⅱ期5回, Ⅲ期9回であった。Ⅱ期の観察回数が5回(設定回数8回)と少ないのは, 自然観察であるため, 観察日であっても, 9月の残暑厳しい日には保育者が意図的に環境構成した水遊びやプール遊びが行われ, 運動会を控えた10月には運動会種目を企図した遊びが校庭で発現し, ままごとコーナーでの自由遊び自体の度数が少ないためである。観察時間は, 登園直後の自由遊びへの取り組み開始時から保育者が恣意的に遊びの流れを変えること(一斉活動に向けての片付けや戸外・遊戯室への移動など)を幼児に伝えるまでとした。自由保育形態の対象園では, 保育者は好きな遊びに取り組む幼児の様子を見極めながら保育の転換を図っていく。したがって, 各回の観察時間は一定ではない。観察総時間数はⅠ期394分, Ⅱ期173分, Ⅲ期347分である。1回当たりの平均観察時間はⅠ期39.4分, Ⅱ期34.6分, Ⅲ期38.5分とほぼ等しく, また本研究が遊びの継続時間ではなく遊びの始発に焦点をあて「役」の生成・成立・不成立の比率を問題にしていることから, 観察時間の差異については問題はないと判断した。

3. 観察方法 保育には参加せず, 幼児からの働き

かけには最小限に応じながらも「観察者」としての立場を保持し観察した。ままごとコーナーにおける登園直後からの遊びの始発を, 幼児の言動に合わせて移動しながら1台のビデオカメラで録画した。観察終了後フィールドノートに補足記録を記した。

4. 分析方法

A 分析単位: 本研究では, 幼児が「役」を生成させることを意図して行動を開始し成立・不成立が確定するまでを, 1エピソードとした。鞆を肩にかけたまま“コーナー”に入ってきて所持品を出しながら談笑するやりとりや, 遊びの小道具を取りにきたときに発現する遊びとは関係ない言動は, 「役」の生成を意図していないものとして除外した。ビデオ記録とノート記録から「役」生成エピソードを抽出した。抽出したエピソードにおける幼児の発話(内容, 語調の強弱, 対象相手など)・身体的行動(表情, 視線, 仕種, 身振り, 身体全体を使つての割り込み, 肘での押しのけなど)・文脈(状況・経緯, 物的・人的環境とのかかわりなど)を, 録画記録に則って文字化した。

B 分類カテゴリ: 文字化したデータを, 「役」生成についての形態から, 能動的生成と受動的生成の2カテゴリに分類した。能動的生成とは, 自らが行動を起こして主体的に“場”や“物”とかかわり「役」を始めることである。受動的生成とは, 他児からの誘いかけが契機ではあるが行動の発現では主体として「役」を始めることである。例えば「おかあさんになって」と他児から誘いかけられると, 自分からエプロンを選んで身につけ, 調理台の前に立って料理を始めたり, 赤ちゃんのベットの所に行きおむつを換える仕種を始めると, 他児の指示や誘導を受けずに自分のやり方で「役」を生成する様相である。

さらに文字化したエピソードと録画記録を再照合し, Table 1の下位カテゴリに則って分類した。

この際, 「おかあさんが赤ちゃんの世話するね」と一方が言うと他方が黙ってコーナーの片隅に行つて“赤ちゃん”のように寝ころがるエピソードの場合には, 世話をするおかあさん「役」は言語表出の1-(d), 黙って寝ころがる赤ちゃん「役」は誘いかけに応じて行動する2-(a)と, 2カテゴリでの成立として数えた。また行動と言語表出の始発性の判断は, 「おかあさんがごちそうつくってあげるね」と言いながらコーナーに入つてきて調理台の前に立った時は言語表出の1-(d), 黙って調理台の前にきて料理を始めてから「おかあさんがごちそうつくるね」と言った時には行動喚起を優先して1-(c), というように, 「役」生成時の文脈からいずれが始

Table1 「役」生成の分類カテゴリと事例

分類カテゴリ		生成した「役」の事例
1 能 動 的 生 成	(非言語行動) 1-(a)	大道具・小道具の先占による生成 乳母車を確保したり、エプロンを身につけたり、コック帽をかぶったりすることで、その物によって規定され象徴される“おかあさん”や“コックさん”の「役」を生成する。
	1-(b)	場の先占による生成 調理台や売り場を先占することで、“場”によって規定される“お料理を作る人”や“お店の物を売る人”などの「役」を生成する。
	1-(c)	行動喚起による生成 取り組む「役」(“犬”や“赤ちゃん”)の動きを、身体的行動で表現しながら他児にかかわっていくことで「役」を生成する。
	(言語行動) 1-(d)	言語表出による生成 「宅急便でーす」と玄関に入ってきたり、「ラーメンください」とお客になって屋台の椅子に座ったり、「役」に相応しい直接的な言動表出や「わたし〇〇よ」とか「入れてー。わたし〇〇」と宣言することで「役」を生成する。
	1-(e)	合意・相互宣言による生成 自分のなりたい「役」を「わたしセーラムーン」、「わたしマーキュリー」、「じゃー、わたしビーナス」などと、互いに宣言し合い合意して同時に「役」を生成する。
	1-(f)	意見調整による合議後の生成 「わたし赤ちゃん」「わたしだって赤ちゃんやりたい」と、やりたい「役」が重複した時に、主張し合いながらもその調整についての意見を出し合い話し合う。その後で「あたしは、ようちえんせいになる」「じゃ、あたしはおかあさん」と互いが納得して行為主体者として取り組める「役」を生成する。
2 受 動 的 生 成	(言語行動) 2-(a)	他からの誘いや指示による生成 “遊び”の周辺にいる時に、遊んでいる他児から「一緒にやろう」とか、「〇〇になって」とか、「ちよつと、そこ押さえて」と誘いかけられたり、頼まれたりしたことに応答しながら、自分のやり方で「役」を生成する。
	(非言語行動) 2-(b)	消極的行動表出による生成 他児が取り組んでいる“遊び”への関心を「店をのぞいて団子をつまむ」「黙って入ってきて食卓の食器を並べ変えていく」などの身体的行動で表現し、他児からそれが容認されることで「役」を生成する。

発かを見極め分類した。

分類に際して、文字化した記録とVTRの映像とを他1名が各期1回計3回照合した。文字記録と映像の一致率は100%であった。その後、文字記録をランダムにI期4回分、II期3回分、III期4回分を抽出し他1名が分類した。その結果、筆者と他1名の評定者間での一致率はI期85.4%、II期88%、III期82.4%で、平均一致率は85.2%であった。不一致については、映像記録を見ながら両者で協議し調整した。

C 3観点からの分析：この分類したデータを、1. 「役」生成と成立、不成立の時期による特徴的な変化の同定、2. 「役」生成から成立展開への方略の分析、3. 「役」不成立事由の分析、の3観点から以下のように分析した。

分析1では、Table 1のように「役」生成および成立・不成立をカテゴリに分類し、3期の変化を検討する。そして分析2では幼児による生成のタイプの個人差を検討する。

分析3では、「役」生成後の15秒間に発現する言動から遊びの生成から成立、安定へといたる過程を検討する。「役」生成後の15秒間の展開における幼児の様態を「身体的行動のみ」「発話のみ」「身体的行動と発話の両方あり」「身体的行動と発話の両方なし」の4形態に分類した(Table 4)。15秒間に限定したのは以下の理由によ

る。①行為主体としての幼児が「役」生成後の言動発現をどのようにしようかと思案している場合でも、大体の場合において15秒の間には決断をくだすことが可能であると判断されること、②行為主体者の言動の発現を、相互作用の相手が黙って待っている時間は15秒間位であると通常考えられること、それ以上になると「早くラーメンちょうだいよ」とか、「わたしが作ってあげる」などの促しや代替行為が発現することが予測される、などの理由による。15秒間にみられた4形態と「役」成立カテゴリを重ね合わせて見ることで、相互作用において齟齬をきたす間合いや言動の“タイミングのずれ”といった、一定時間内における「役」にかかわる言動発現の個人差が捉えられると考えた。

分析4では、「役」不成立事例を「自分からの放擲」「呼応・返答が得られず」「他児からの否認・拒絶」の3カテゴリに分類し検討した(Table 5)。呼応・返答が得られず(無視も含む)、他児からの否認・拒絶は他児との関係性で捉える不成立である。お客「役」の生成を試みて「おだんごください」と声をかけるが、店の幼児から呼応・返答が得られずあきらめて立ち去ってしまう事例、「ラーメンください」と屋台に座るが、ラーメン屋の幼児から言下に「だめです」と拒絶されて不成立になる事例などである。自分からの放擲とは、行為主体者になって生じた「役」を相互作用の中で自ら放棄した不

成立である。

分析においては、行動の生起率・頻度という数量的検討で時期的変化を捉えて「役」の生成・成立の発達過程を明確にしていくが、同一カテゴリでも質的な違いを示したほうが良いと判断した場合には、できるだけ多くの事例を質的に記述することによりその質的な違いを示す手法をとることにした。

Ⅲ 結果

縦断観察で捉えた「役」生成総数は214例、成立総数185例、不成立は29例であった。「役」生成・成立・不成立のカテゴリ分類内訳結果は、Table 2 の通りである。

1. 1 年間における生成・成立の時期的変化

A 期別に捉えた「役」の生成数 Table 2 で「役」生成率をみると、I 期55.1%(118)、II 期15.9%(34)、III 期29.0%(62)と、II 期、III 期で減少している。これはII 期には前述のように設定保育と戸外遊びが多かったた

めであり、またII 期、III 期には、同じ「役」を維持しながら長時間遊んでいたことから生じたものである。

B 非言語行動表出から言語行動表出へ Figure 1 を見ると、非言語行動を表す 1-(a)(b)(c)、2-(b)の占める割合がI 期からII 期に減少し、1-(d)(e)(f)の言語行動の割合がII 期、III 期に増加している。

さらにこれを下位カテゴリの分類から見ると、まず非言語行動に関しては、1-(a)大道具小道具の先占による「役」生成(不成立も含む)がI 期に29例、II 期3例、III 期0と次第に減少していること、1-(b)場の先占の生成はI 期に2例のみであること、1-(c)行動喚起による生成は48例、期内生成率40.7%と高いという結果が得られた。

これらの結果は、入園からのI 期には場や物の先占、行動喚起という言語を伴わない役の生成が多いことを示している。

C 生成・成立の事例

そこで入園当初のI 期における遊びに見られた「役」の生成・成立・不成立の過程を以下の事例で詳述す

Table 2 「役」生成・成立・不成立カテゴリ分類

	1 能動的生成						2 受動的生成	
	〈非言語行動〉			〈言語行動〉			2-(a)	2-(b)
	1-(a)	1-(b)	1-(c)	1-(d)	1-(e)	1-(f)		
I 期								
生成〔118〕	2.9 (24.6)	2 (1.7)	4.8 (40.7)	3.1 (26.3)	4 (3.4)	1 (0.8)	0	3 (2.5)
成立〔102〕	2.4 (23.5)	2 (2)	4.4 (43)	2.4 (23.5)	4 (4)	1 (1)	0	3 (3)
不成立〔16〕	5 (31.3)	0	4 (25)	7 (43.7)	0	0	0	0
II 期								
生成〔34〕	3 (8.8)	0	7 (20.6)	1.5 (44.2)	3 (8.8)	4 (11.8)	1 (2.9)	1 (2.9)
成立〔30〕	3 (10)	0	6 (20)	1.4 (46.7)	1 (3.3)	4 (13.4)	1 (3.3)	1 (3.3)
不成立〔4〕	0	0	1 (25)	1 (25)	2 (50)	0	0	0
III 期								
生成〔62〕	0	0	1.6 (25.8)	2.5 (40.3)	1.0 (16.1)	5 (8.1)	6 (9.7)	0
成立〔53〕	0	0	1.3 (24.5)	2.0 (37.8)	1.0 (18.9)	5 (9.4)	5 (9.4)	0
不成立〔9〕	0	0	3 (33.3)	5 (55.6)	0	0	1 (11.1)	0

注.()内の数値は同一期内の%を表す。

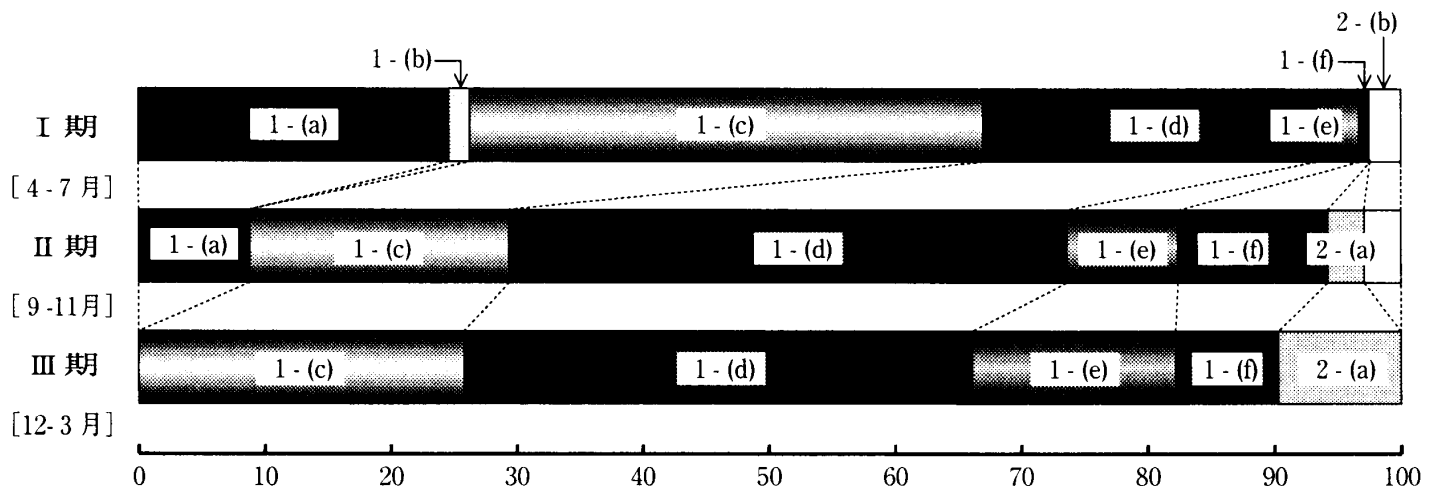


Figure 1 「役」成立における生成カテゴリ比率

る。ここで言動の詳細を時間的に列挙するのは、物を介した身体の動きによって役が成立する様相を描出するためである。

事例1-1：I期4月中旬 生成・成立するカオル、ジュリ、ミカの「役」と不成立になるマリコの「役」非言語行動を中心とする生成

登園後、カオルはままごとコーナーの引出しからスカートを出してはき、コーナーから道具棚の方に出ていって、棚から型ブロックを出して紐通しを始める。引出しからベールとスカートを出して身につけたジュリは、コーナーの中をうろうろしている。スカートをはいたミカはコーナーのテーブル、椅子、食器棚、調理台の間を行き来しながらコップや皿を並べていく。やがて、ジュリがカオルの方に出ていき、黙って隣に座ってブロックの紐通しをだす。ミカはままごとコーナーの片隅に移動し中から身を乗り出すようにしながらジュリ、カオルの様子を見ている。カオルはそばにいるジュリを気にもせず、「どれかな?」と独り言をいいながらブロックのかごの中を探り、ブロックをひとつ取り出して「チューリップの型だからね」とジュリに見せてお喋りがはじめる。マリコが引出しからエプロンをだして首にかけ、後ろ手で紐を結ぼうとしながらカオルとジュリの方にやってくる。

カオルはブロックに紐を通しながらマリコを見て、近くにきた時「お姫様ごっこだよ」と声をかける。マリコは小声で答えて、ままごとコーナーに戻っていく。ミカはこれらの様子をじっと見ている。コーナーに戻ってきたマリコは、エプロンの紐を結ぼうとうろうろしている。ジュリが入ってきて「お姫様ごっこしているんだよ」と後ろからマリコに声をかけ椅子に座る。紐を通したブロックをもってカオルがコーナーに戻り、調理台の鍋をいじってから椅子にすわる。

マリコは二人を気にせずエプロンの紐結びに挑戦している。ミカが移動してきて皆のやりとりを見ている。椅子に座っているジュリが「いま、お姫様ごっこだよ」と再びマリコに声を掛ける。マリコは聞こえなかったかのようにジュリに近づき、「結んで」とエプロンの紐結びを頼む。ジュリは一瞬手を出して結びかけるが、「お姫様ごっこしてるんだから」と手を引っ込めて断る。「だから(不明)、結んでよ」と、マリコはまたジュリに背中を向ける。カオルが椅子から立ち上がりマリコの後ろに回り込んで「だから、お姫様ごっこ!」と強く言う。マリコは左ひじでカオルの胸を押す。それを見たミカは「(不明)じゃ、いけないんだよ」とマリコに言う。カオルは再びマリコに「お姫様

ごっこだからね」とハッキリと伝える。マリコが「タイム」と、右手でカオルの胸を2度こづく。「タイムとか、しないでよ!」とカオルは強い口調で言い、マリコをにらみつける。マリコは右手をのばしてカオルの腕をつかもうとするが、カオルは身をかわして避ける。「エプロンやって」とミカがマリコに声をかけると、今度はミカに背を向けて後ろ手でエプロンの紐を示す。ジュリは、マリコとミカの動きを見ながら小声で「お姫様ごっこだからね」と伝える。

ミカがエプロンの紐を見ながら「エプロン」とマリコに言うとうと、マリコは首からエプロンを外し床に投げ出して動きだす。カオルはマリコの投げ捨てたエプロンを拾い上げ、何か言いながら引出しにしまおうとする。ミカもカオルの側に行き「ここなら」と一緒にしまいだす。コーナーから出ていこうとしたマリコは、二人の動きを見ると戻ってきてカオルの腕を2度叩いて急いで離れる。「いたい! いたいよ!。イエーン、イエーン」と腕をおさえながらカオルが大声で泣きだす。「何したのよ?」とジュリがマリコに声をかけると、マリコは「ごめん」とカオルに頭をさげ、そばに行つて腕をさすったり顔をなでたりしだす。

入園当初の本事例では、“お姫様ごっこ”における「役」の生成・成立はスカート・ベールなどの“物”によって象徴され、共通のものを身につけたことで、カオル、ジュリ、ミカたちは“お姫様ごっこ”の一員として「役」が生成し、互いの暗黙の受容・容認によって成立する(1-a)。一方エプロンで象徴するマリコの「役」の生成は他児から容認されずマリコがエプロンを投げ捨て、自分から放擲し不成立になる。

しかし「役」が成立しなくても、幼児は何らかの言動を発現し遊びを始発していこうとする。事例1-1で不成立になったマリコは、以下の事例のように「役」の生成・成立に向けての言動を発現していくことでやがて場を先占すること(1-(b))で「役」が成立し、遊びの流れに入っていく。

事例1-2：事例1-1後のマリコの「役」不成立から成立への展開過程

カオルの泣き声に「どうしたの?」と教師が近寄ってくる。「あたしね」とマリコが言いかけると、カオルが「あのね、マリちゃんがペンした」と腕を示して教師に訴える。「ふーん、ペンしたの」と教師が応えると、マリコはカオルの身体を抱きかかえるようにしながら「あのね、あたしのせいなんだって」と教師に話す。教師はマリコの頭をなでながら「あ、『あたしのせいなの』か。分かってんの

か。じゃ、「ごめん」って言おうね」とマリコの腕をなでながら諭すように言う。マリコがつぶやくのを聞いて、教師はカオルの腕に触れながら「マリちゃん分かっているの。『ごめんね』っていつてるからね」と伝える。カオルがマリコの方を向くと、マリコはしょんぼりと下を向いてしまう。教師は「どうしたの?」と尋ねるが下を向いたまま答えない。ジュリが「あのね、お姫様ごっこしているんだけどねー」と教師に話しかける。教師が「うん、お姫様ごっこしているんだけど?」とジュリに聞き返すと、ミカが「一人だけエプロンしているの。マリちゃんだけエプロンしているの」と答える。「マリちゃんだけエプロンしているの」と受ける教師に、さらに「お姫様ごっこって言ったのに。ぜんぜんエプロンはずさなかったの」とミカが答える。「ふーん、ぜんぜんエプロンはずさなかったの。それがお姫様じゃないと思っちゃったんだ」。カオルが「全然ボタンはずさないの」と付け加える。「マリちゃん、エプロンしてたらどうなるの?」と教師が聞くとマリコは黙ってうなづく。さらに「ドレスがなかったの?」とマリコに尋ねる教師に、「あるよ」と引出しをあげながらミカが答える。ジュリも「あるよ」とミカに同調して言う。

マリコは「あのね、あのね、おかあさんごっこ」とやっとなと教師に伝える。「ああ、おかあさんごっこしたかったのか。マリちゃんはおかあさんごっこで、おかあさんになりたかったのか?」と聞き返すとマリコはうなづく。「だけど、ミカちゃんとカオルちゃんとジュリちゃんは、お姫様ごっこだからー。マリちゃんに『スカートはきな』っていったの?」と教師が聞くとマリコは首を横に振る。続けてマリコに「『エプロンがおかしいよ』っていったの?」と聞くと、小声で「うん」とうなづく。「ふーん、どうしようねー」と思案する教師をみながら、マリコはエプロンを取りに引出しに向かう。それを見て教師は「マリちゃんはエプロンなのね、やっぱり」と呟く。その時、他児が大声で教師を呼ぶ。それに応えて「でも、マリちゃんはエプロンをやりたいみたいよ」とカオルに言いながら、教師はコーナーから出ていく。

マリコは引出しからエプロンを取り出し、紐を首にかけようと後ろ手でさぐっている。カオルとミカはマリコの様子を見ながら「パーティーやる」と言い、二人で相談を始める。エプロンを首にかけたマリコは、部屋の反対側にいる教師のところいきエプロンの紐を結んでもらう。カオルはミカは話しながら教師とマリコの様子をじっとみている。エプロンをつけたマリコは、コーナーの反対側から入ってきて調理台の前で道具を探し出す。カオルはマリコの隣にいくと紐を通したブロックを流し台に入れ、「これー(不明)だからね。これでお姫様のー

(不明)小さくしてね」と顔をみながら頼む。マリコは「はい!」と大きな声で返事をして、流し台のブロックを取りあげる。カオルがブロックをとりに出ていくと、ジュリが寄ってきて「このお鍋、もうなんか入れてあるの?」と調理台で働いているマリコに声をかける。

以上の事例でエプロンをしたマリコが、カオル、ミカ、ジュリたちの“お姫様ごっこ”の一員として参加しているかどうかは定かではない。しかしエプロンをしてコーナーの調理台を占有し言動を発現したマリコは、“調理台で調理をする人”としてカオルやジュリの言葉で容認され、「役」が成立した。先述のように、相互作用のなかで遊びやイメージをすり合わせながら共有可能性を見だしていく4歳児では、対人的調整能力があることから、事例1-1で不成立だったマリコの「役」が、事例1-2では1-(b)で成立し、遊びが展開していった。

しかしI期に多く見られた非言語行動表出1-(c)での「役」の生成がII期III期でも20.6%、25.8%と1-(a)、1-(b)、に比べてやや高い。このことは、担任の保育者が遊び加入時の「入れて」「仲間に入れて」の言語表現を先取りして一斉に教示する事はせず、個々の場面や状況において必然性が生じた時に、個別に伝えるという方法をとっているためにII期III期でもI期と同じように「役」を始発していく幼児がいたこと、また遊びが繰り返される中で好きな「役」を先取りするための方略として、先ず行動を起こしてから宣言をするといった幼児ができたこと、などに由来する。

1-(d)の言語表出による「役」生成・成立を見ると、I期とII期III期では量的変化だけではなく、質的にも次の違いが各分類カテゴリについて見られた。

I期の“宅急便や”“おだんごや”“おすしや”などは、物の導入や場の設定によって「役」が生成しやすく、相手の視覚に訴えて遊びの小道具を呈示したり、直接的な呼びかけ(「いらっしやい。おだんごいかがですか」「ピーンポーン。宅急便でーす」など)によって「役」が成立していた。ところがII期III期になると「大学生のお姉さんね」とか「私、中学1年生」などと、個人的にイメージする人の属性を添えて「役」が生成・成立していく。「役」成立後、「お母さん、デパートに行ってくるからね」と、自分の母親固有の仕方でお出かけ準備を始めたり、自分の家の赤ちゃん特有の振る舞いをしていった。I期が物や場の設定に誘導されて「役」が生成・成立するのに対して、II期III期では固有のイメージを具現し、「役」を生成させるという期による違いがやりと

りの中でみられた。

またⅠ期の1-(e)相互宣言は、テレビ番組を取り込んだ「役」発生・成立事例である。「私、セーラームーン」「私、マーキュリー」などと言い合いながら「役」が同時に生成成立していた。これは、テレビ番組のキャラクターを入園前に熟知しているという、幼児たちの先行経験が作用している。これに対しⅢ期の1-(e)は、ままごとコーナーで繰り返されてきた名もない遊びが収束され、固有のイメージが共通のイメージを有した“遊び”として命名され、展開していく過程である。「お母さんごっこしよう」「うん、いいよ。赤ちゃんごっこしようね」と、命名の違いに言及せず「役」を宣言し合いながらイメージを共有し展開していった。「なにやってくるの?」の問いかけに「○○ごっこ」と答えるように、遊びの命名はⅡ期後半頃から日常的に見られたが、上記のように呼び名の不統一にはⅢ期になっても言及していない。分類カテゴリーとしては1-(e)、1-(f)で捉えられる「役」の成立を縦断的に見ていくと、入園時の平均月齢が54.6ヶ月と比較的高い4歳児の学級集団という実態から、1-(e)、1-(f)による役の生成・成立はⅡ期Ⅲ期で交錯して発現している。

さらに1-(e)、1-(f)の合意・相互宣言・意見調整の過程を詳細に見ると幼児間の力関係の台頭や方略転換、葛藤などが見られた。

以下に1-(e)、1-(f)として捉えられた「役」の生成・成立の過程を詳述する。

事例2-1：Ⅱ期9月上旬 宣言と調整による成立過程

マリコが「赤ちゃん連れていくからね。マリちゃん、おかあさんね」とカオルに言って、人形を乗せた乳母車を押していく。カオルもマリコと同じように人形を乗せた乳母車を膝立ちで押しながら、「あたし、赤ちゃん」と言いながらマリコと一緒に部屋の中を動き回る。サチコが登園し、鞆をかけたままカオルのそばに行き「終わったら(所持品の始末が)赤ちゃんにしてくれるんだよ」と言う。カオルはサチコに答えず、サチコの鞆についている小物を手で触りながら話をそらすように「これと同じねー、色違いの持ってるよ」と話します。サチコはカオルの話題にのらず「じゃーさ、これ終わったらー(不明)」と再度言う。

その時ジュリが通りかかり、カオルとマリコの乳母車の人形を入れ換えて立ち去る。それを契機にカオルとマリコは乳母車を押して動き出す。「これ終わったら赤ちゃんね」とカオルについて歩きながら言い続けるサチコに、カオルは「赤ちゃんはね」と言うと早足にマリコのいる方へ乳母車

を押して行く。

マリコとカオルが乳母車を押して部屋の片隅でとまった時、ジュリがやってきて「ジュリちゃん、おかあさん」と言います。マリコはすかさず「えっ、まりちゃん、おかあさん!」と言り返す。鞆をかけたままのサチコはカオルの乳母車を揺すりながら「え、じゃー、赤ちゃんは?」と聞く。「ー(不明)」とカオルが応答する。

しばらくして鞆をおいてきたサチコが、絵本棚の方に移動していくカオルと並んで歩きながら話しかけていく。乳母車を押しながらカオルが「あたしも赤ちゃんになりたいんだから」と答えて絵本棚の前に行く。そこでカオルが「じゃあ、二人赤ちゃんね」とサチコに言う。サチコがカオルに返事をするが、カオルは不本意な顔で応えない。カオルの顔を見たサチコは「そうだ!」と手をたたき、ままごとコーナーの中のジュリを見ながら「ジュリちゃんおかあさん。カオルちゃんがジュリちゃんの赤ちゃんで、サチコちゃんはマリちゃんの赤ちゃん」と言う。ジュリがコーナーの中から「マリちゃんはおねえさん。ジュリちゃん(サチコとカオルを交互に指さし)おかあさん」と答える。それを聞いたマリコは「マリちゃん、おかあさんがいい」と大声で言う。手をあげてコーナーから出てきたジュリは「ちょっと、ジュリちゃんがおかあさんだよ」マリの頭をなでながら言う。「えー、マリちゃん、おかあさん」と抗議するマリコ。そのやりとりを見ていたカオルは二人の方を見て「あたし、おねえちゃんの大学3年生」と宣言する。マリコが「あー、おかあさん」と言り返すと、カオルはマリコに向かって「マリちゃん。あたしね、おねえちゃんの大学3年生」と再び伝える。マリコはサチコが床で這い這いしているのを見ながら「マリちゃん、おかあさん」と主張する。マリコの方に手を伸ばしてジュリが「おねえちゃん」と言う。マリコ、おかあさん」と応酬するマリコ。そのやりとりを遮るように両手を広げてカオルが二人の間に入ってきてジュリに、「小さいからゆずってあげてー」と言う。「えっ」と聞き返すジュリ。カオルは再び「マリちゃんの方が小さいからー」とジュリに言う。「だって(不明)も考えているよ」とジュリが言うとカオル、マリコが笑いだし、ジュリもつられて3人で笑い合う。

マリコがジュリに「わんちゃんにすれば?」と言うと、「(不明)にすれば?」とカオルも提言する。床に這ったままサチコが「赤ちゃんだよ」とみんなに言うと、「マリちゃん、おかあさん」とまた言いつのるマリコ。ジュリは床にしゃがむと「やっばり、ねこでー。じゃいいよ、ねこで」と言って這いはじめる。マリコ乳母車を押して出ていく。サチコ、ジュリは這いながら部屋を動き回る。この事例で「役」を始発して遊びが安定するまで、カ

オルとサチコが“赤ちゃん”の「役」をめぐる、マリコとジュリが“おかあさん”の「役」をめぐるやり取りが展開していく。結果として、カオルは始発した“赤ちゃん”ではなく“大学3年生”になり、マリコは始発した“おかあさん”が成立し、サチコは“赤ちゃん”を成立させ、ジュリは“ねこ”として遊びだし、遊びが継続し、各々が主張しながら意見を調整し決まっていた。

以上は能動的な生成であるが、他からの誘いかけによる受動的な「役」生成では、Ⅲ期2-(a)の事例に、誘われる幼児が望んでいると思われる「役」を成立させてあげる姿が見られた。

コーナーの近くでうろうろしながら見ていたハルミに「入る？」と声をかけ、「うん。入れて」とハルミが入ってきて「役」を生成させる前に、ミナが「おねえちゃん、3人になっちゃった」と発言した。「3人って、だーれ？」と心配気に問いただすハルミに、「ミナちゃん(自分)とジュリちゃんと、-(無言でハルミを指し示す)」とハルミを員数に入れて答えると、ハルミは嬉しそうな顔をした。他の2-(a)は、能動的に行動ができない幼児を気づかって遊びに誘い入れたり、“赤ちゃんごっこ”の場面に必要な“おかあさん”の「役」を担う幼児が見つからないために周辺の幼児に誘いかけていく事例である。またⅠ期Ⅱ期の2-(b)は、コーナーの屋台の前でうろうろしている時に「はい、お水一丁！」と掛け声とともに屋台の端にコップを置かれ、思わず手を出して飲んでしまい“お客”になってしまった事例等である。受動的な役の生成・成立には、他者の存在を実感している4歳児が遊びの中で余裕をもって他児と関わられるようになってきた発達の変容がうかがわれる。

以上、分析1の量的質的結果は、Ⅰ期からⅢ期へという時期の経過とともに“物”に依存せずに「役」が生成・成立していくことが可能になるであろうという予想1や、「役」生成・成立過程における相互作用が非言語行動から言語行動へと発達的に変容していくこと、さらに言語行動も一方向的なものから双方向的なものへと変容していくことを予想する2、そして仲間との協働可能性や自己抑制や自己調整能力の発達が、「役」成立によって発展・展開していく遊びの流れに大きく作用していくだろうという予想3を支持するものである。

2 役をめぐる幼児のタイプと内的葛藤

1-(e)合議・相互宣言による生成と、1-(f)意見調整による合議後の生成における役の生成・成立過程を、詳細に検討していく中で、3タイプの幼児がみえ

られた(増田・秋田, 1999)。(1)やりたい「役」を一途に主張して自分の「役」として成立させる幼児。(2)やりたい「役」について主張し、固定化に対する抗議や批判を表明して交代を要求する幼児。(3)やりたい「役」を主張はするものの、要求や抗議はせずに抑制する幼児、である。

事例2-2とTable 3を見るとわかるように、サチコ(S)は主張するタイプ、マリコ(M)、ユリコ(Y)は役の固定化を批判・抗議するタイプである。カオル(K)はⅠ期ではこの2つの様相を示していたが次第にTable 3左段での「No.19→No.43→No.59→No.73」にみられるように抑制的に譲歩するタイプになっていった。

そして10月頃から泣きながら登園し、登園しぶりの様相を呈してきた。その結果「登園しぶりによる家庭での支度の遅れ→他児より遅れた登園→遊びへの参入の遅れ→「役」要求表出の機会の喪失→「役」をめぐる葛藤の体験→より重い登園しぶり」という悪循環構造に陥っていった。しかし12月には消極的な抗議を試みた(Table 3 No.49)結果、事例のような解決策を講じられるようになってきた。

事例2-2：Ⅲ期12月上旬二人の赤ちゃん「役」の出現

ままごとコーナーでユリとカオルがかごの中に入っている玉入れの玉をいじって遊びだす。サチコがきて、「入れてー」とユリに言う。ユリが「いいよ」と答えると即座に手をあげて、「赤ちゃんー」と言いながら入ってきてゴザに上で這いだす。

カオルはサチコを見ながら「じゃーね、じゃーねー」とうろうろしだす。サチコとユリがコーナーの外のマリコとお喋りを始めると、カオルも柵越しにお喋りの仲間に入る。サチコが「赤ちゃんね」とカオルに話しかけると、マリコが割り込んできて「じゃ、マリちゃん、赤ちゃんー」と宣言するように言うが誰も答えない。サチコ、ユリ、マリコがそばにやってくるとカオルはゴザの上を行ったり来たりしながらサチコに話しかける。「え、サチコさー(不明)」と返答したサチコに何か言い返そうとするマリコをみて、カオルが手で制する。「だって赤ちゃんばかりやっているよ。サチコちゃん」と抗議するようにマリコが言うと、サチコはカオルに同意を求める。しかしカオルは、「うーん」と言うだけで手を後ろに組んで歩きだす。

カオルが止まって「ジャンケンしたら」と言いだすと、「じゃ、マリちゃん、ようちえんせい」とマリコが新たな役を宣言するがサチコは何も言わない。黙っているサチコにカオルが「ずっと前、お部屋の中では-(不明)でしょ。外

では- (不明)と決めたよね」と言う。「そうだったっけ？」とサチコが答える。「そうだった」と言い切るカオル。サチコは少し考えてから「あ、そうだ。こうしようよー。あのさー」と言うのとどちらからともなく身体を近づけてずっけ、声を出し合いながら触れ合ったり転げたり這いまわったりして、二人が“赤ちゃん”になって遊びだす。

ここではサチコ、カオル、マリコのなりたい役が遊びの始発時に重複し、マリコは他の役に転換するが、サチコ、カオルはともに“赤ちゃん”の「役」を成立させて、二人の“赤ちゃん”が出現した。そして3月には満足して主体的にその役を生成・成立できるようになっていった。

これは観察者による観察情報が保育者に伝えられ、個別的な配慮により役をめぐる葛藤解決への援助がはかられていくという本研究のもつアクションリサーチの側面によるものである。

この事例のように、幼児のタイプと集団内での力関係によって、子どもの中には自己主張と自己抑制の葛

藤の狭間でストレスや内的葛藤が生じる者もいる。これまで遊びの研究では、言動が目立つ自己主張タイプの子どもの研究が多く行われてきた。しかし同一コーナーに限定して、そこに集まる子どもたちに焦点をあてて役の生成・成立を見ていくことによって、役をめぐるあり方、特に集団の歴史性の中で抑制譲歩タイプの子どもの抑制から調整の中での自己主張へと発達することが示唆される。

“遊び”が命名可能な遊びとして確立していくに従い、集団内で共有されるスキーマとしての「役割」(高木, 1990)が明確になってくる。当初行為主体として、不確定で生成・成立させていた「役」が、イメージやプランを共有した同じ枠内に捉える「役割」として発達していき、“遊び”の位置に付随する「役割」を有した「役」が求められるようになり、同集団内で役の固定化がうまれていく。合議や相互調整は一般的な子どもの共同調整能力の発達として捉えられるものではなく、幼児のタイプと関係の形成・発達という集団の歴史性によって考慮される必要性が本結果からは示唆される。

Table 3 カオルの「役」成立に向かう要求と葛藤の時期的変化 抜粋事例：9月・12月・3月
事例(抜粋) 9月・12月・3月 [資料NO・時間経過・幼児名：言動]

9月：Mがお母さん、Kが赤ちゃんになってコーナーの乳母車で遊びだす。	12月：登園後の子どもと教師でコーナーを整備する。SとKは柵の外から見ている	3月：タオル掛けの前でタオルについてやり取りをした後で、コーナーに移動する。
4・0025 K：あ、あたし、赤ちゃんー。	4・0005 Y：(ゴザを直そうと)ちよっと、これー(Kに柵越しにかごを渡す)	23・0106 Y：赤ちゃんごっこしよう。(コーナーに入っていく。K、Sも移動する)
17・0125 S：(登園後、鞆を掛けたままKの正面に来て)じゃーさ…、これ終わったら赤ちゃんにしてくれるんだよ…(不明)。	5・0008 K：かごを受け取り、中に入っている玉入れ用の赤玉をいじりだす。	24・0110 S：外から柵に触れ広げようとする。
18・0128 M：Mちゃん、お母さん!	6・0008 S：(KをみながらYに)入れてー。	25・0112 Y：(Sに)あ、動かさないでー。
19・0132 K：(Sに答えず、Sの鞆の小物に触りながら)あたしね…、これと同じの……、色違いの持ってるよ……。	8・0010 S：(Yの「いいよ」の答えと同時に)手をあげて大声で)赤ちゃん!	26・0113 S：(Yに)なんで?ー。
20・0138 S：(Kの手を払うかのように鞆を振り動かす)じゃーさ…、これ終わったら…(不明)。	25・0056 K：コーナーに入ってきて動き回る	27・0114 Y：(Sに)いま、やるからー。
43・0253 K：(Jに)あたし、赤ちゃん…	35・0116 M：じゃ、Mちゃん、赤ちゃん…	28・0114 K：あにゃん、あにゃんー。(飛び跳ねながら二人の方を見ている)
58・0324 S：(移動するKに)あたし……	36・0117 S：(Mに)えー、Sさ……(不明)。	35・0121 S：ピーンポー。(這って入っていく。Yが入れ違いに出ていく)
59・0325 K：(乳母車を押してSと歩きながら)あたしも……、赤ちゃんになりたいんだから……。	37・0118 K：Mを制するように手を伸べる。	37・0125 S：(柵に触りながら)これー、どーするー、狭いよー。
60・0327 M：(KとSに)二人赤ちゃんは?	38・0119 M：えー。だって…、赤ちゃんばかりやってるよ、Sちゃん…。	38・0125 Y：(Sに答えず、Kに手を差し伸べ)ああ、赤ちゃん、おいでー。
63・0336 S：そうだ。KちゃんがJちゃんの赤ちゃんで、SはMちゃんの…	39・0123 S：(Kに同意を求めて)…(不明)ね。	39・0127 K：Yの後から這って入ってくる。
73・0417 K：(Sを見ながら)あたし…、お姉ちゃんの大学3年生…。	40・0125 K：(Sに同意を示さず)う、うーんと…(両手を後ろに組んで思案気は、柵に沿って行ったり来たりしながら歩き始める)。	41・0130 Y：(柵を動かすSを制しながら)広げないでー。
	49・0138 K：(Sに面と向かって柵越しに)あのさ…、ずっと前さ…、お部屋の中では…(不明)…やっていいって、決めたでしょ…。外では…(不明)…て決めたよね…。	45・0142 S：撫然としてコーナーの片隅に行く
		46・0144 Y：(Kに)じゃ、いま生まれたのね。
		47・0145 K：あにゃー、あにゃー(嬉しそうな顔をしながら机に上体を投げ出す)。
		48・0148 Y：テーブルの上ののせているKの頭をなでてから、調理台の方に行く。

注 数値は資料NO・VTR撮影後の時間経過、英字Kはカオル、Sはサチコ、Yはユリを示す。

3. 役成立から展開へ：「役」成立後の表出様態の時期の変容

「役」成立後15秒間の言動表出の様態を整理したのが、Table 4である。それぞれのタイプの成立による展開には次のような特徴が見られた。

1-(a)「物」を介した「役」成立後：I期では、54.2%が「身体的行動のみ」(黙ってテーブルの上に食器を並べだすなど)で遊びに取り組んでいた。分析1で示したように、集団への初期参加において「物」と関わって遊びに取り組む様相である。しかし同じI期でも、「身体的行動と発話の両方あり」も37.5%あった。これは「物」に依存しながらも「役」成立直後から発話を加えて遊びに取り組む幼児が多いことを示す。このことは相互作用が非言語行動から言語行動へと発達的に変容するという予想2を支持する。

1-(c)行動喚起による「役」成立後：「身体的行動のみ」の発現はI期65.9%、III期46.2%でIII期の方が低い。一方「身体的行動と発話の両方あり」がI期27.3%、II期50%、III期46.2%と、II期III期で高い。これ

はI期では「役」成立後も身体的行動だけで遊びに取り組んでいたのに対して、II期III期になると言語表出もまじえて取り組む様相を示し、非言語行動から言語表出へという予想2を支持する。II期の事例では、ままごとコーナーで身体的行動でポケモンの「役」を成立させた二人が、ポケモンの身振りを交わし合った後「よし、こっち!」「うん、そっち!」と声を掛け合い、共有している遊び空間を保育室外へと移しながら遊びを展開していった。成立した「役」に発話を加えて遊びの展開を説明している。

1-(d)言語表出による「役」成立後：「身体的行動のみ」がI期、II期、III期を通して見られる。これは言語方略で「役」を成立させたものの「役」にかかわる発話はせず「身体的行動のみ」で「役」を続けている幼児がいたためである。しかしI期でも「身体的行動と発話の両方あり」は66.7%と高い。これは分析1で述べたように、I期1-(d)が物や場を通して視覚的にもイメージやプランがもちやすい「遊び」において発現したことに由来している。これに対しI期35.7%、II期70%の「身体的行動と発話あり」では、特定の人の属性をイメージして「おかあさん」や「赤ちゃん」を具現するものであり、期による質的な違いを示すものである。1-(d)I期II期の「身体的行動と発話の両方なし」は、登園直後に持ち物の始末をしながら言葉を交わし合い「役」を生成・成立させたものの、鞆をしまいにロッカーに移動していくことで15秒以上経過し「身体的行動と発話の両方なし」となった偶発的なものである。

1-(a)(b)(c)非言語行動、2-(a)他からの誘いかけによる「役」成立後：1-(a)(b)(c)の「身体的行動と発話の両方なし」がいずれもI期に多い。2-(a)III期の「身体的行動と発話の両方なし」の4例は、他児からの誘いかけに応じて「おねえさん」や「おにいさん」の「役」を成立させて遊びに入ったものの、言動表出に15秒以上要している事例である。協働的計画や調整的行動の発達に由来する「役」にかかわる言動表出がIII期においても見られないのは、幼児の特性、状況や受動的生成を能動的成立に変容していくために時間がかかることや遊びの流れに乗り切れない幼児の存在を示すものである。

1-(e),(f)言語行動表出による「役」成立後(1-(d)は既述)：自覚的に「役」に向かう宣言・合意・意見調整による成立であることから、「発話のみ」でも十分に「役」を維持していったり、「じゃ、ねこ!」というなり直ぐに床に這って動きだし、各自の固有イメージが繰り返しの中で再現容易になり「身体的行動と発話の両

Table 4 「役」成立後 15 秒間の言動表出の様態

成立カテゴリー/期	身体的行動のみ	発話のみ	身体的行動と発話の両方あり	身体的行動と発話の両方無し	
1 (a)	I期	13 (54.2)	0	9 (37.5)	2 (8.3)
	II期	3 (100)	0	0	0
	III期	0	0	0	0
1 (b)	I期	0	0	1 (50)	1 (50)
	II期	0	0	0	0
	III期	0	0	0	0
1 (c)	I期	29 (65.9)	2 (4.5)	12 (27.3)	1 (2.3)
	II期	3 (50)	0	3 (50)	0
	III期	6 (46.2)	1 (7.6)	6 (46.2)	0
1 (d)	I期	3 (12.5)	2 (8.3)	16 (66.7)	3 (12.5)
	II期	2 (14.3)	3 (21.4)	5 (35.7)	4 (28.6)
	III期	2 (10)	4 (20)	14 (70)	0
1 (e)	I期	0	4 (100)	0	0
	II期	0	1 (100)	0	0
	III期	0	5 (50)	5 (50)	0
1 (f)	I期	0	1 (100)	0	0
	II期	1 (25)	2 (50)	1 (25)	0
	III期	0	1 (20)	4 (80)	0
2 (a)	I期	0	0	0	0
	II期	0	0	1 (100)	0
	III期	1 (20)	0	0	4 (80)
2 (b)	I期	3 (100)	0	0	0
	II期	1 (100)	0	0	0
	III期	0	0	0	0

注。()内の数値は同一期内の%を表す。

方]が発現していた。

以上のように、役成立後の展開においてもⅠ期とⅡ期Ⅲ期では相違があることが示された。これは遊びの展開の質の変容として捉えることができよう。

4. 「役」不成立の事由

不成立の事由を分類したのがTable 5である。「役」生成不成立の比率は、13.6%と低い。

「自分からの放擲」は、事例1-1として紹介したように、Ⅰ期の“お姫様ごっこ”のやりとりの中でマリコがエプロンを投げ捨てる事例や、ラーメン屋の屋台に

スターに乗っているかのように、全身を揺らして楽しんでいる。

うろろしながら見ていたハルミはミカに「入れて」と言うが、ミカは段ボールを扱うのに夢中で答えない。ミカとジュリの操作に合わせて、マリコ、サチコ、カオル、ユリたちは乗り降りして席を交代していく。ハルミは、ジェットコースターのまわりを動き回りながら他児が乗り降りするたびに「入れて」と言うが、皆は自分の動きに夢中で誰も答えない。ハルミはあきらめてその場を立ち去る。

この事例で、ハルミは1-(d)で「役」が生成・成立することにこだわって、なかなか遊びに入れられない。また、他児がタイミング良く黙ってジェットコースターに乗り込んで乗客になっていくのに気がつかない。一人だけ生真面目に「仲間に入れて」と1-(d)言語表出による役の成立を意図して何度も問いかけるが、夢中になって遊んでいる他児は気付かず、あきらめて立ち去った。言語による生成成立にこだわるための不成立である。その後ハルミは、ミカから返答を得て不成立を成立に転換して、ジェットコースターの乗客になって遊びを楽しんでいた。

この1-(d)の「呼応・返答が得られず」で不成立だったハルミの成立への転換は、事例1-2のマリコの1-(a)の「自分からの放擲」の不成立から成立への転換とは、発達的にみて質的な違いが明らかである。

他の事例は「たこ焼きください」と呼びかけるが売り手が後ろを向いていて気付かず、それ以上声をかけずにあきらめて離れていく事例、売り台の前で売り子になって待つが、だれも自分には呼応してくれないので売り子を諦めて離れていく事例などである。

「他児からの否認・拒絶」は、Ⅰ期の37.4%に比し、Ⅱ期75%、Ⅲ期77.8%とⅡ期Ⅲ期が高い。4歳児の他児からの否認・拒絶は、3歳児のような“物の占有”をめぐるいざこざ(木下, 斉藤, 朝生, 1986)ではない。いつも“ポケモンごっこ”をしているB夫が「入れて」と来ると「だめです」「ポケモンごっこじゃないんだからね」とB夫の役を固定的に捉えた拒絶であったり、「ほく、おにいちゃん」とコーナーに入ってきて「役」を宣言して成立を試みるが、「おにいちゃん(他児が)もういる」と遊びの構成員を考えた否認事例、などである。

以上は、集団の歴史性に伴う不成立事由の時期的変化、質的变化を予想する4を支持するものである。これは友達とのつながりを広げ集団で活動することを楽しみ、他児の存在を実感し他児の動きにも目を向ける

Table 5 「役」生成後の不成立カテゴリ分類

不成立 期・カテゴリ	自分から の放擲	呼応・返答 が得られず	他児からの 否認・拒絶
Ⅰ期	5 (31.3)	5 (31.3)	6 (37.4)
Ⅱ期	0	1 (25)	3 (75)
Ⅲ期	1 (11.1)	1 (11.1)	7 (77.8)

注.()内の数値は同一期内の%を表す。

黙ってすわが店の幼児からラーメンが出されると手も出さずに黙って立ち去る事例、遊びの周辺をうろろしている時に仲間になって遊ぶことを誘いかけられ(受動的生成)、自分の望む「役」を成立させて遊び出そうとしている(能動に転換)時に「○○になって」と要求されて立ち去る事例などである。Ⅰ期の5例に比し、Ⅱ期Ⅲ期の発現が少ない。

「呼応・返答が得られず」は、いずれの期も、自分の遊びに夢中で他児からの働きかけに気付かず呼応・返答が得られない事例である。以下にⅡ期の“ジェットコースター遊び”を記述し「呼応・返答が得られず」の不成立過程を検討する。

事例3 Ⅱ期9月中旬 言語表出「役」成立にこだわるハルミ

板状にした大型段ボールを遊戯室から玄関先のロビーに運んできて、マリコ、サチコ、カオル、ミカ、ジュリたちが乗り降りしたり、引っ張ったりしながら乗り物に見立てて遊びだす。ハルミは皆が遊びだしたのを見ながらうろろしている。ユリがきて黙って段ボールに乗って仲間に入る。乗り物から降りてきたミカが、段ボールの前を持ち上げて引っ張る振りをする。ジュリも降りてきて、段ボールの後ろを持ってミカの真似をして引っ張る振りをする。マリコ、サチコ、カオル、ユリたちは、ミカとジュリの動きに合わせて「キャー」「キャー」と大声をあげてジェットコー

ことができる4歳児が、勝手な放擲行動を自己抑止する自己統制能力や相互交渉能力を発達させていくことによると考えられる。

IV 全体的考察と今後の課題

1. 「役」生成・成立・不成立過程から捉えた4歳児の発達の側面

本研究では、4歳児の遊びの発達の變化を「役」生成、成立・不成立、展開の3様相の過程から捉えた結果、発達の變化として新たに次の4点が明らかになった。

第1は、役の生成内容の分析結果から、I期は入園当初の不安な気持ちを受け止めてくれる“モノ”や“場”に依存した「役」の生成・成立や、行動喚起による「役」の生成・成立が多いことが明らかになった。ただし、“モノ”が幼児を同じ“場”に位置させ遊びを始発させる3歳児の並行遊び(無藤,1996)とは、4歳児の遊びは異なっている。4歳児では“モノ”や“場”から「役」を生成・成立させながら、相互作用の中で連合遊びや共同遊びを展開していく。そしてII期III期では、“モノ”や“場”に依存しないで遊びを始めるよう発達的に変容していく。物の役割は指摘されるが、それが期によってどのように変化するかが、本結果により明らかになった。

第2は、I期の非言語行動から、II期III期には宣言・意見調整・合議といった言語行動の発現によって「役」が生成・成立するよう変わっていくことである。このことは、4歳児の相互作用の質が非言語行動中心から言語行動中心になっていくことを示している。非言語によるやりとりという事実は言及されてきたが、期により表現様式が発達的に変化していくことを明示できたのは、1年間の縦断観察を、役の始まりの過程のみに焦点を限定した研究方法によるものである。

第3は、「役」成立後15秒内の言動の分析から、II期III期になると「行動と発話」の両方が多く発現することが示された。このことは、「役」の方向性を相互作用の中で素早く明示し組織的な遊びの流れをつくり出していく協働的計画や調整的行動の発達として考えられる。遊びの展開における身体共同性の役割は、砂上・無藤(1999)によって指摘されている。本研究もごっこにおける共同調整での身体行動の重要性を示唆するものといえる。言語のみではなく共同調整において言語と身体表現が遊びの中で機能するよう発達していくと考えられる。

最後に、I期に見られた「自分からの放擲」による「役」不成立が、II期III期には減少することが示された。これは、4歳児の自己抑制力と方略転換スキルの発達を示唆するものである。そこには対人関係の變化と同時に、自己と他者認識の発達が指摘できる(内田,1989)。仲間の恣意的規則に従っていた3歳時期とは異なり、4歳児期は恣意的規則から脱した規則概念が成立する時期である(斉藤,1986)。幼児は互いの自己実現における矛盾や対立・葛藤の中で発達していく(鯨岡,1998)。本研究では特にIII期に「他児からの否認・拒絶」が顕著であった。これは集団およびその集団内での役割の固定化過程に起因すると考えられる。役の生成・成立過程での幼児のタイプの違いが示すように、個々の幼児の特性を保育者が理解し、役をめぐる葛藤の質的検討を行うことが重要であると考えられる。

2. 保育実践への示唆

上記の4結果から、“遊び”の成立にいたる過程において次の4点が保育実践において重要であることが示唆される。

第1は、“場”や“モノ”と幼児との関係を保証することである。I期に見られる「おだんごや」「おすしや」は、入園当初の幼児たちが、保育者が工夫して配置したり設定しておいた“場”や“モノ”に依拠しながら「役」を生成・成立させていった結果である。4歳児には3歳児に比べ“場”や“モノ”に依存する期間は短い、不安な気持ちで入園してくる4歳児の拠り所として“場”や“モノ”は大切であると考えられる。今回は物の特性や配置等は分析できなかったが、場を構成するものとして重視し、遊びの展開にとって適当な環境の設定を保証する必要があるだろう。ごっこコーナーのように年間を通して安定的な場が保証されることは安心して遊べる場、幼児の側で工夫変化でき、相互交渉の力を育てていける場を提供すると考えられる。

第2は、非言語行動表出から言語表出への移行を保育者が見とることである。非言語行動表出から言語表出への発達の移行は、自己主張や自己実現という能動性を相互に調整しあうことができる相互性の体験の蓄積によって可能となる(西原,1995)。仲間集団への参加や役成立のための安直な言語方略の指示により援助するのではなく、幼児自身が生活の中で必然に直面する中で自ら相互性を獲得できる経験を保証し援助していくことの必要性が本結果からは示唆される。

第3に、「役」成立直後の言動から“遊びへの構え”を

把握することである。「役」成立後に身体的行動も発話もない状態は、幼児の間では遊びにおけるタイミングのずれと感ぜられることもある。そのことが度重なることによって、集団内での幼児の地位、参加構造に作用すると考えられる。「役」成立後の状況や関係性に逡巡する幼児の取り組み方、遊びへの構えを把えながら、幼児間の相互作用における“間合いのずれ”の調整に保育者が関わることで、保育の中で「ちょっと気になる幼児」を援助していくことになる。

第4は、「役」不成立事由の含意を踏まえ、幼児の特性やタイプを踏まえた行動の理解と関わりを行うことである。「役」不成立は、行為主体である幼児と他児との関係に規定される。本分析結果2で示したカオルの事例はそのことを示している。「自分からの放擲」「呼応・返答が得られず」「他児からの否認・拒絶」の背後には、行動生起の文脈、他児との関係性、過去の行動様式などが含まれている。否認・拒絶が保育者に訴えられた後で「どうして、〇〇ちゃん入れてあげないの?」と尋ねると、「いつも〇〇ちゃん(途中で)、やめちゃうんだもん」と過去の〇〇の行動様式による拒絶であったり、「遊園地の人(お姉さん)は二人だから、あとで入れてあげるの」と遊びの規則概念に則した一時的な拒絶であったりする。役不成立という現象だけではなく、その背景となる幼児の意図や構えの様式を捉え、援助することが求められよう。

3. 今後の課題

本研究では、ままごとコーナーでのごっこ成立までの過程の縦断的分析を行ったが、今後さらに次の5点の検討が必要と考えられる。

第1に、遊びの構造からみて、ままごとコーナーでの遊び以外のごっこ遊び、中でも役割が固定的な遊びと独自の発想による役の生成が可能な遊びでの、役の生成・成立過程の相違と共通性の検討である。ままごとコーナーは、ごっこ遊びの中でも比較的狭い空間に限定され小さな素材が使われる遊びであり、役割自体が他のごっこにくらべて限定的であり、どの幼児にも知識の共有が容易なものと言える。他の遊びにおける役の生成・成立においても、4歳児期に同様の発達傾向がみられるかどうかはさらなる検討課題である。

第2に幼児側の要因として、本研究の対象は2年保育の4歳児であるが、3年保育経験の4歳児での検討か、幼児の保育年数要因の検討が必要である。そして幼児の特性や先行経験の個人差要因が、遊び開始時の「役」の生成をどのように規定しているのかを検討する

必要がある。

第3に遊びにおける役をめぐる葛藤が、個々の幼児の他の場面での自己主張や自己抑制の発現や発達とどのように関連するのか、発達の側面の相互関連の検討である。「役」生成・成立をめぐる抑制的翻意や過度の自己主張といった対立や葛藤が、発達にどのように寄与していくのかを検討する必要がある。

そして、個の発達とあわせた幼児の集団形成過程の分析である。これまで多くの研究が個の発達に焦点をあててきたが、幼児期における集団としての学級や遊び仲間集団がどのように形成され、そこでの参加構造がどのように固定化し子ども間の社会的地位の力関係として現われ、「役」の生成・成立・不成立に関与していくのか、個の発達と保育における集団のダイナミクスを分析していく必要がある。

上記の課題を今後外部研究者と保育者で共有検討し、保育実践に寄与するアクションリサーチとして展開していくことが求められていると考えられる。

〈付記〉

本研究にあたって一年間の縦断観察を承諾していただき、事例を理解するための情報提供にも時間を割きご協力くださいました渋谷区立千駄ヶ谷幼稚園 東川則子先生と他教職員の方々と園児の皆さんに心より感謝します。本論文は、IとIV3は秋田が、II、III、IV1、2は増田が第1著者となった共著論文であり、増田・秋田の連名で発表してきた一連の学会発表(1998教心、1999発心、1999教心)を新たに論文としてまとめたものである。

(引用文献)

- 秋田喜代美(編) 2000 教師のさまざまな役割. チャイルド本社
 秋田喜代美・市川伸一 2001 教育・発達における実践研究. 南風
 原朝和・市川伸一・下山晴彦(編) 心理学研究法. 東京大学出版会 pp.153-178.
 Corsaro, C.B. 1985 Friendship and peer culture in the early years. Norwood, NJ.: Abex
 Garvey, C. 高橋たまき(訳) 1980 ごっこの構造. サイエンス社(原著刊行, 1977年)
 岩田純一 1998 〈わたし〉の世界の成り立ち. 金子書房
 梶田毅一 1996 〈自己〉を育てる - 真の主体性の確立. 金子書房
 金田利子・岡村由紀子・山岡三佐子 2000 保育の中で発達の危機をどうのりこえるか: 自己コントロールできない自分みつめる「4歳児」の分析をとおして. 保育学研究, 38(2), 17-25.
 柏木恵子・大野裕美・田島信元・氏家達夫 1989 幼児の self-regu-

- lationの発達. 発達心理学研究, 5, 63-77.
- 木下芳子・斉藤こずゑ・朝生あけみ 1986 幼児の仲間同士の相互交渉と社会的能力の発達: 3歳児におけるいざこざの発生と解決. 埼玉大学紀要 教育学部(教育科学), 35, 1-15.
- 厚生省児童家庭局 1999 保育所保育指針. チャイルド本社
- 鯨岡 峻 1998 両義性の発達心理学. ミネルヴァ書房
- 文部省 1999 幼稚園教育要領. チャイルド本社
- 増田時枝・秋田喜代美 1999 4歳児の遊び集団における「役」をめぐる葛藤—「役」成立に向かう要求と葛藤プロセスの事例検討—, 日本教育心理学会第41回総会発表論文集, 423
- 無藤 隆 1996 幼児同士の付き合いの成立過程の微視発生的検討. 人間関係学研究, 3, 15-23.
- 無藤 隆 1997 協同する体とことば: 幼児の相互交渉の質的分析 金子書房
- 西原彰宏 1995 発達体験. 大場幸夫・前原寛(編著), 保育心理学. I 東京書籍 179-202
- 野村寿子 1999 遊びを育てる: 出会いと動きがひらく子どもの世界. 協同医書出版社
- 小川博久 2000 保育援助論. 生活ジャーナル
- 斉藤こずゑ 1992 仲間・友人関係. 木下芳子(編) 新・児童心理学講座: 対人関係と社会性の発達. 金子書房 PP29-82
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ 1986 仲間関係. 無藤隆・内田伸子・斉藤こずゑ(編) 子ども時代を豊かに: 新しい保育心理学. 学文社 PP59-111
- Sawyer, R. K. 1997 Pretend play as improvisation. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers Mahwah, N. J.
- 柴崎正行(編) 1997 保育環境の構成. 小学館
- 砂上史子・無藤隆 1999 幼児の仲間関係と身体性. 乳幼児教育学研究, 8, 75-84.
- 高木英至 1990 役割. 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一(編) 社会心理学パースペクティブ. 誠信書房 PP70-92
- 高木和子 1997 4歳と5歳. 発達, 70, ミネルヴァ書房 27-33
- 高橋たまき 1991 子どもの遊びと生活. 無藤隆(編), 新・児童心理学講座: 遊びと発達. 金子書房 PP113-165
- 高濱裕子 1995 自己主張タイプ児の遊びをめぐる交渉の発達. 発達心理学研究, 6(2), 155-163.
- 東京都立教育研究所幼児教育研究部 1992 幼稚園における友達集団と遊びの充実に関する研究. 東京都立教育研究所紀要第36号.
- 東京都立教育研究所幼児発達研究室 1996 幼児・小学校第1学年児童における“自己”の発達とその指導. 東京都立教育研究所紀要第40号. 東京都立教育研究所.
- 津守 真 1984 自我のめばえ. 岩波書店
- 津守 真 1987 子どもの世界をどうみるか: 行為とその意味. N H Kブックス
- 内田伸子 1989 幼児心理学への招待. サイエンス社